

を貰う者も多くなり、収容所内にマガジン(売店)ができ、映画、演劇などの文化活動も盛んになり、食堂では日ソ合同のダンスパーティーも開かれた。私が帰国したのは、抑留生活も安定期を迎えようとしていた、昭和二十四年十一月一日の信濃丸であった。

シベリア抑留

青森県 竹内 大

①敗戦の影を引きずって

思いもかけぬ「敗戦」の報を告げられた私達の心理的打撃は誠に大きかった。混沌と動揺の中で明確な命令も与えられなかったが、一大変事という事態なので命令も出ないのだろうと思いつ、事の推移を見守ってひたすら待つ以外に方法がなかった。

今まで、殆ど、「戦況」を知らされることもなかったが、まさかこれほどまでに状況が悪化していることも知らず、ひたすら訓練に励んでいた私達にとっては悔しさと無念の思いが胸中を去来するだけだった。

この日から敗者としてのみじめな、孤独な影を引きずりながら、帰国の当てもない長いみちのりの第一歩を踏み出すこととなった。

② 海林の道

その後四〇五日経ってソ連軍が進駐してきた。

そして「武装解除」となり丸腰となった。その思いは複雑で筆や口では言い表せぬものがあつた。

やがてソ連軍の命令により「海林」への移動が始まつた。マンドリンを肩から吊るした警戒兵がついてくる。途中には「日の丸の旗」を被せられて死んでいる兵士がいた。八月の暑い盛りなので、何十メートルも先なのに死臭が漂ってくる。「ガス」で体や足は張りさけんばかりに膨れているのがひと目でわかつた。小川には重なり合つて死んでいる人馬。また、ある場所には見習士官を小隊長とする一個小隊ぐらいの人数が死んでいるのもあり、まさに目を覆うような悲惨な有様を目撃した。私達も戦闘に遭遇しておれば恐らくこのようになつていたのだろう。私は仮にそのようになつても、精いっぱい戦つて戦死するのであればそれでも本望ではないかと自分に言い聞かせた。

③ 泥水と「真つ黒な飯」

海林へ着くまで三〇四日ぐらい行軍した記憶がある。ただ、当時のような状況下では落伍すれば「命の保障」もないといふので、皆黙々と歩いてきた。暑いので無性に喉の乾きを覚える。しかしどこを見ても水のある場所は見えない。ただ行軍途中の道端の穴に溜り水のあるのを目にした。不衛生とか、汚いとかそんなことを考えている余裕もない。溜り水の「上澄み」をすくつて飲む。味もそつてもない。

夕方にはその水で飯盒炊きをした。できたものは「真つ黒」で今では到底食べられるものではない。だが、それでも食べないわけにはいかず、思い切つて胃袋の中に押し込んだ。誠に変な味だ。途中での野営で雨に降られたこともあり、海林に着いた途端に大腸炎にかかり早速隔離される破目となつた。

④見知らぬ兵士の死

入れられた所は「架設病院」と称する弾薬庫であつた。コンクリートの床にアンペラが敷かれ、背囊を枕にし外套を掛けて寝る。晩になると「木箱」の上にローソクを立てて衛生兵がついていた。周囲では痛みを訴えてわめいたり、うなつたりする者がいたが手当をする医薬品は何一つなく、もちろん手術できるわけもなくただ放置されている状況だつた。

私の隣にいた兵士も夜中にわめいていた。どのような戦傷なのか私にはわからない。翌朝目をさましたら静かになつていた。「おい、夜が明けたぞ」と私は声をかけ体をゆさぶつたら「ガクン」と頭が背囊から落ちた。恐らく夜中か、明け方近くにでも息を引き取つたのであろうか。しかし、私にも彼の「死」の最後を見届ける余裕は全くなかつた。

どこの誰とも分からない。一人、異郷の地で誰にもみとられることもなく死んでいったこの兵士

のことを考えると「人間とは何か」と深刻に考えさせられた。どんな思いをして死んでいったのだろう。父や母や兄弟等、家族のことや友達のことを思いながら、黄泉の国へ一人旅立つたのである。それ以来、私も死というものに対し、今まで極度に持っていた恐怖の念というものがだんだん薄れた。そのことは、いつかは自分にも与えられるものであるということからだつた。

幸いにも私は順調に快方に向かつた。というのは、仲間の候補生が「ゲンノシヨウコ」を煎じて一升瓶に入れて持ってきてくれた。そのお蔭で日増しに良くなつた。漢方薬の効能に驚くとともに、候補生達の暖かい気持ちに胸の詰まるような感謝の気持ちでいっぱいであつた。

⑤打ち砕かれた帰国の夢

区隊に復帰し、しばらくぶりで皆との生活が始まつた。話によると入ソは確実らしく、そのための準備をするようにとソ連側より指示があつたら

しいとのことだった。十一月の下旬頃かと思うが「被服の支給」が行われた。その中には私達が初年兵の際、瓊瑋の部隊で使っていた大手袋があった。また満服などがあった。この事実をみるにつけても「シベリア送り」は決定的な現実として私達にのしかかってきた。

今まで、持ち続けていた帰国への一縷の望みは完全に断ち切られてしまった。

⑥貨車にて北上

そうこうしている内に私達は「入ソ」のため貨車に乗せられた。有蓋貨車で真ん中にストープがあり、両側は板で上下二段仕切りになっていた。

決められた人数がその中に寝るには、頭と足の位置を交互に、互い違いにして横になるより仕方がなかった。狭くて寝返りもできない。貨車は北上を続けているとのことだった。今まで帰国だ、いや入ソだと色々な話を耳にしたが、結果的に私達に与えられたのは入ソだった。敗戦という負い

目を背負った日本には、それを阻止することはできなかつたのだろう。

貨車は果てしない原野を走っているようだったが、いったいどのあたりなのか皆目見当が付かない。それだけ入ってくる情報も殆どなかつたのである。車が止まり扉が開かれると思いついて深呼吸をする。白々とした雪野原で、それを見るだけでも寒さが身に凍みてくるようだった。停車するたびに「パン」を入れた籠を持ったソ連の女達が時計や万年筆と交換を迫るかん高い声だけが雪中に反響していた。

⑦ガレージに押し込められて

今になってははつきり「月日」の記憶がない。しかし、海林から出発したときから考えると十二月頃なのだろうが、十二月の何日なのか、何曜日なのかも分からない。とにもかくにも収容所のある地域に来たのか、私は貨車から降ろされた。ともかく寒い。

直ちにトラックに乗れとのことだ。トラックで収容所へ輸送されるらしい。車上に十何人かいたようだ。雪の中をエンジンの音を立てながら原始林のような松の大木の生い茂っている林道を走った。雪の白さと薄暮の薄暗さが妙に頭の中にこびりついている。

ところが途中でいきなり車が止まった。右手に自動車庫みたいな建物があった。いきなり「車から降りろ」と言うことで、建物の中に押し込められた。何をするのかと思ったら前の方から所持品を物色し取り上げていたのだ。ある程度のものを取ると再び車に乗せて発車した。警戒兵と運転手が組んで当初から私達の持っているものを略奪するつもりでいたことが後になって分かった。

⑧ 闇に光るナイフ

私はトラックの最後尾に座っていた。車が走り出すと、いきなり目の前にピカッと光る金属を見た。私は本能的に立ち上がり編上靴でそれを蹴つ

た。鈍い音を立てて落ちた者がいた。突然のでき事だったが車が勢いよく走り出したので、難をのがれることができた。もしも下手をして捕まるとどのようなことになっていたのかを考えると一瞬ぞっとして血の気を引く思いだった。まさに危機一髪というところであった。

車は相変わらず林道を走った。そうしているうちに有刺鉄線を巡らした場所が見えた。収容所らしい。

⑨ 収容所での一夜

車から降りて、向こうを見ると防寒帽をかぶった兵隊が私達を見ていたが、言葉を交わす暇もなかった。収容所内に入るとちよつとした小さな建物に入れられた。丸太を積み重ねた小屋だった。アメリカの大統領リンカーンの暮らしていたのも、こんな丸太小屋だったなどと思いあらためて小屋を見た。しかし、荒れるにまかせていたのか、雪が吹き込んでくる。

暗いし、火の気もない。今日一日のことを考えると思いもかけぬ事ばかりで気持ちの休まる暇がなかった。炊さんをしたくてもそれもできない。腹は減っているが食べる気持ちも起こらない。寒さと暗さのためすべてを諦めて、防寒帽、外套を着たままで板の上に横になった。うつらうつらしているうちに何もかも忘れてしまい、隙間から雪の吹き込むのを承知で眠ってしまった。何となく、朦朧として色々な事柄が頭の中をよぎっていった。こんな寒さの中で、よく寝たものだと思い、自分でも不思議だった。朝起きたら丸太の隙間から吹き込んだ雪が防寒帽の上に、のっそりと積もっていた。